怪盗レイヴン②

天才双子とキケンな組織!?

秋木 真・作

シソ・絵

アルファポリスきずな文庫

目次

Contents

0 プロローグ 006

1 ターゲット：イリディウム財団 009
2 七海、天才かも 017
3 潜入ルート発見 027
4 ミライの苑へ 032
5 封じられた上履き 042

6 仲間？　兄妹？ 054
7 ユアくんと兄の影 062
8 21時、裏口にて 074
9 静かなる予兆 080
10 闇に照らされる決意 087
11 メアを探して 095
12 決意の夜明け前 103

13 メアくんの箱 108
14 謎を刻んだ紙片 117
15 怪盗レイヴン、出動 123
16 隠された入り口 136
17 地下の秘密 144
18 希望を奪われた子どもたち 152
19 走れ、脱出への道 160

20 迫る追手 169
21 プロミス・ボックス 178
22 隠された出口を探して 187
23 自由への一歩 193

24 エピローグ 211
あとがき 220

登場人物紹介

不破幹也

幸樹の友人で春香の相棒。
クールだけど実は面倒見がいい。

朝霧春香

パソコンが好きな中学一年生。
行方不明の兄を探して怪盗レイヴンになる。

怪盗レイヴンとは?

ここ数ヵ月で有名になった正体不明の怪盗。
わるい企業や組織に潜入して、悪事の証拠を盗んでくるんだって! テレビでよく特集されているよ。

Character

朝霧幸樹

春香の兄。ある日、突然行方不明になるが……

沢田七海

春香の友人。いつも明るく元気。

宮坂彩加

ミライの苑のボランティアで出会った高校一年生の女の子。

南雲メア

ユアの双子の弟。一週間前から消息不明。

南雲ユア

ミライの苑の少年。パソコンが得意。

0　プロローグ

「おい、こっちに来い！」
白衣を着た男たちが、**男の子**を怒鳴りつける。
「いや……」
首を小さくふる男の子に、白衣の男がいらだったように近づいていく。
「おまえに拒否する権利はない。……ここには、**だれも助けになど来ない**」
白衣の男はニヤリと笑い、男の子の視線をねじ伏せるように見下ろした。
「……そうだろ？」
白衣の男が腕をつかむと、男の子はあきらめたようにうなだれる。
男の子の様子に満足した顔になると、白衣の男は男の子を連れて、部屋の奥に歩き出す。
白衣の男がドアを開けて、べつの部屋に入ると、男の子を軽く中へ突き飛ばす。
よろけてから立ち止まったものの、部屋の中は真っ暗でなにも見えなかった。

「じゃあな」
男の子がふり返るのと同時に、**バタン**とドアが閉められる。
しんと静まり返った部屋の中で、男の子は身動きがとれずにいた。
カタン。
小さな物音がした。
視線を向ける。
目が暗闇になれてきて、そこになにかがいるのがわかった。
「**だれか……いるの？**」
小さくふるえる声で、男の子は話しかける。
カタン。
また物音がべつのところからした。
音がしたほうを見る。
「ああ……」
男の子は、あきらめの声をもらす。

カタン……

コトン……

どこかで、なにかが床に落ちる音がした。

ようやくはっきりとわかった。

目の前にいるのは、男の子と変わらないぐらいの年の子たちだ。

二十人ほどはいるだろうか。

みんなひざをかかえて、うつろな目をしていた。

男の子は、ぼんやりと自分に向けられている四十個の瞳を見ながら理解した。

――**もうぼくに助けなんて来ないんだ。**

そう、**メア**は思った。

1　ターゲット：イリディウム財団

カチャ、とティーカップの小さな音が響く。つられるように、わたしは目をやった。

アジトのキッチンで、**幹也さん**が紅茶をいれている。

わたしはその後ろ姿をながめつつ、鼻をくすぐる紅茶のいい匂いを感じる。

そういえば、**お兄ちゃん**も紅茶をいれることがあった。

ふだんはそんなことしないのに、ごくたまにだったから不思議に思っていたけど、もしかしたら幹也さんの影響だったんだろうか。

「どうぞ」

ティーセットを二つ持ってきた幹也さんが、ダイニングテーブルのわたしの前に一つ置く。

ポットをテーブルの真ん中に置いて、幹也さんもイスにすわった。

ティーカップを口に運ぶと、ふわりと紅茶の香りが広がった。

さっきキッチンにあったパッケージに、**ダージリン**と書いてあったからそれかな。
「おいしいです。でも意外です。幹也さんが紅茶をいれるのがうまいなんて」
「**趣味**だな。いれていると落ち着くというだけだ。幸樹にもいれていたよ」
「たぶんその影響で、お兄ちゃんも家で紅茶をいれてくれることがありましたよ」
「幸樹が？　おれはいれてもらったことはない」
幹也さんが、不満そうに顔をしかめる。
「この紅茶より、おいしくはなかったですよ」
お世辞にも、上手だったとは言えない。

「当然だ。おれのいれた紅茶だからな」
満足そうな顔をする幹也さんを見て、わたしは思わず噴き出す。
幹也さんも、表情をくずして笑った。
わたしが幹也さんと出会ったのは、偶然だった。
行方不明になったお兄ちゃんの手がかりを探しているうちに、一冊のノートを見つけた。
そこに書かれていた名前が、**不破幹也**――今、目の前にいるこの人だった。
お兄ちゃんと同い年の**中学三年生**で、有名な進学校の**白鳳中学校**に在学している。
わたしは、白鳳中学校まで行って、幹也さんに会うことで、ある真実を知った。
お兄ちゃんと幹也さんは、一緒に**怪盗レイヴン**という世の中の悪事を暴く怪盗をしていたことを。
そして**お兄ちゃんが行方不明になる前に残したリスト**には、不正が行われているらしい企業や組織が書かれていたんだ。
わたしは幹也さんに頼んで、新たな怪盗レイヴンの一人として活動していくことになった。

このアジトも、その怪盗レイヴンで使っているものなんだ。
「それで次のターゲットについてだな」
幹也さんが、A4の用紙をテーブルの上に置く。
これがお兄ちゃんが残したリストだ。
もちろん、これはコピーだけどね。
「次のターゲットはどうするんですか？」
「当てはつけてあるが、春香に相談してからだと思って、今日呼んだんだ」
「幹也さんが決めても、文句を言ったりしないですよ？」
幹也さんの判断がまちがってたところを、見たことがないし。
わたしよりたしかだと思う。
「今は、春香も仲間なんだ。怪盗レイヴンは合議制だ。相談しないで決めることはしない」
幹也さんは真剣な顔をわたしに向けてくる。
そうだ。わたしだって怪盗レイヴンになったんだから、全部幹也さんにまかせきりでいい

わけない。
あまりに幹也さんがいろいろできるから、つい頼っちゃうけど……
でもそれじゃ、怪盗レイヴンとしては半人前だよね。
がんばらないと！
「ごめんなさい。当てっていうのは？」
「これだ」
幹也さんが、リストにある一つの名前を指さす。
「**イリディウム財団**？」
聞いたことのない名前だ。
わたしはノートパソコンを開いて、検索する。
検索ヒットは一万件以上。これはけっこう多いほうだ。
トップに表示されているのは、「イリディウム財団」の公式サイトみたい。
わたしはクリックして、サイトを開く。
「イリディウム財団は、おもに慈善事業を行っている組織だ。とくに親がいなかったり、

まともな家庭環境でなかったりする子どもへの支援をしている」
幹也さんの説明と同じようなことが、公式サイトにも書いてある。
「評判もいいみたいですね。さらっと見た感じですけど、**悪いウワサ**とかも見当たりませんし」
悪いウワサがある場合は、「**イリディウム財団**」と打ち込むと、次に「**ひどい**」とか「**悪い**」とか、そんな単語がならんで出てくる。
そういうのが出てこないってことは——少なくとも、ウワサレベルの悪評も見当たらないってことだ。
真実かどうかはべつとしても、悪いウワサがあることがわかる仕組みなんだ。
「行っているのは不幸な立場の子どもへの支援で、あやしいところは見当たらない。だが、それでもこのリストには載っている」
幹也さんは、お兄ちゃんが残したリストを指で示す。
「なにか裏があるのかも？」
「でも、ウワサすらないとなると、簡単にはボロは出なそうだな。それに財団が支援している組織は複数ある。すべてがあやしいのか、どこか一か所がなのかもわからない」
「そうですね。でも、幹也さんがイリディウム財団を選んだ理由はわかりましたよ」
リストに数ある候補の中で、どうしてイリディウム財団なのか。
ちょっと考えれば、すぐわかる。
「イリディウム財団が裏で悪事を働いているのなら、その被害者は子どもたちの可能性が高い。だからじゃないですか？」
「……ああ。子どもが被害にあっているのなら、リストに載っているほかの企業より、緊急性が高いと考えた」
「なら、調べてみましょう。一つ興味深い組織がありますよ。これです」
わたしは、パソコンの画面を幹也さんに向ける。
「**特別支援研究施設ミライの苑**？」
「はい。この施設は、いわゆるふつうの児童養護施設とはちがっていて、〝**才能ある子どもを伸ばす**〟という点が特徴的です。イリディウム財団の公式サイトでも、たびたび紹介されてます」

「才能ある子どもたちを伸ばす、か。いいことのようにも思えるが……」
「引っかかる言い方な気がします。**大人のエゴ**みたいなものを感じるっていうか。もちろん、わたしが最初から疑って見てるからっていうのは、あると思うんですけど」
ふつうに見ただけなら、わたしもなにも思わなかったはずだ。
でも、見ているうちに、胸の奥にざらりとした違和感が残った。
「わかった。ミライの苑を中心に調べてみよう。春香はネットを中心に頼む。おれは施設やイリディウム財団を知っている人間がいないか、探ってみる」
「了解です。絶対に手がかりを見つけます！」
わたしは大きくうなずいた。

2　七海、天才かも

「うう……ねむう」
わたしは、朝の教室で落ちてくるまぶたをなんとかこらえていた。
今朝は早くに登校したこともあって、教室にはまだ生徒の数はまばらだ。
昨日は、アジトから帰ったあと、イリディウム財団について調べてたんだよね。
夕飯とシャワーの時間以外はずっと調べものをしていて、気づけば早朝の四時。
「今寝たら絶対に起きられない……」
そう思ったら、数学の宿題をやっていないのを思い出して、眠い頭でなんとか終わらせた。
そのまま登校して、気づけばいつもより早く学校に着いていたんだよね。
「**おはよー！**　春香」
元気な声と一緒に、肩をトンとたたかれる。

ふり返ると、友達の**沢田七海**が立っていた。
「おはよう……」
ぼんやりとした頭で返すと、七海がバッグを席に置いてからもどってくる。
「眠そうだねー。また寝不足かな？」
七海が、わたしの顔をのぞきこむ。
「集中してたら、徹夜しちゃって」
「新しいプログラムでも組んでたの？」
わたしと七海は、**パソコンが好きな同士**だ。
だから七海も、わたしが徹夜しそうなことは思いつく。
「それとも……」
七海が、心配そうな表情に変わる。
言いたいことはわかった。
行方不明のお兄ちゃんのことを調べてたの？
そう聞きたいけど、口に出すのをためらってるっていう顔だ。

「プログラムだよ。面白そうなのを思いついちゃって」
わたしは、笑顔をつくって答える。
「そっか！」
七海は、ほっとしたように笑顔になった。
わたしがお兄ちゃんのことを探して寝不足になるほど苦しんでいたら、七海はきっと心配する。
七海は、そんなわたしを放っておけるような子じゃない。
それに、本当にお兄ちゃんのことを調べていたわけじゃない。
……完全に無関係ってわけでもないけど。
「ま、危ないことをしてたりするんじゃないならいいよ。新しいプログラム、今度見せてね」
しばらく話しているうちに、チャイムの予鈴が鳴ったので、七海は席にもどっていく。
七海には、心配をかけちゃうな。
でも、怪盗レイヴンとして動くには、多少の無理は覚悟しないと時間が足りない。

昼間の時間は、こうやって学校で身動きがとれないし。
使えるのは放課後から夜だけ……。それも毎日ってわけじゃないし、しかたがないよね。
それだけ時間をかけて調べたイリディウム財団についても、新しいことがわかったとはあんまり言えない。
おもにわかったのは、公式サイトに書いてあるような**表向きの話**だ。
困難な立場にある子どもを救いたいという理念や、今までどんな成果があったかとか。
確認していくほど、悪い組織どころか、どう見ても社会に貢献している〝**正しい組織**〟にしか見えなかった。
それが調べてわかったこと。
イリディウム財団の理事長はメディアにも出ていた。
名前は、**鳳山昭彦**といって、インタビューにも写真つきで答えている。
その記事も読んだけど、写真の印象も、インタビューの言葉遣いも、受け答えは柔らかくて温和な感じだった。
困難な立場の子どもを助けるという理念も、押しつけがましくなく語られていて、思わ

ず共感しそうになった。
でも、これだけじゃわからないよね。
前に怪盗レイヴンがターゲットにした**シロサキ・グループ**も、表向きは〝**いい会社**〟だった。
社長の**城崎恭一**は、メディアでカリスマ社長として、さわがれていたんだから。
それに、いろいろと調べたけど、イリディウム財団については理事長はよくメディアに出ていても、それ以外の情報はほとんど見つからなかった。
まるで壁に隠されているみたいだった。
「ミライの苑」の出身の子どもについても、プライバシーを理由に取材は断っているらしい。
その対応だって、なにも不自然じゃないし、子どもを守っているんだよね。
どこを見ても、あやしい気配なんてこれっぽっちもない。
——でも、お兄ちゃんが残したリストにある以上、なにかはあるはずだ。
わたしが、それを見つけられていないだけ。

こういう調査こそ、わたしが役に立てる場面なのに……
なのに……全然、歯が立たないなんて……
お兄ちゃんが、どうしてリストに載せたのか、影も形もつかめてない。
キュッと、わたしはくちびるをかむ。
なにもわからないままだと、気持ちばかりが焦ってくる。
そんなことを考えこんでいるうちに、あっという間に一時間目の国語が終わっていた。
「なんか難しい顔してるね。さっきの国語でわかんないところでもあった？」
休み時間になって、七海がやってきた。
「いや、そういうんじゃないけど……」
「**お姉さんに相談してみなさい！**」
七海が冗談っぽく言って、胸を張る。
「だれがお姉さんよ。一ヵ月、わたしのほうが誕生日早いでしょう」
七海の言葉に、わたしの気持ちもふっとゆるむ。
「そんな細かいことは忘れたー」

七海が明後日のほうを向く仕草に、思わず笑ってしまう。
イリディウム財団のこと、七海に聞いてみようかな。七海ならなにか知ってたり気づいたりするかもしれない。
ふと、そう思った。
人への聞きこみは幹也さんがするって言ってたけど、わたしだってしても問題ないはずだし。

「いきなり変な話だと、思うかもしれないけど……」
「うんうん、りょーかい」
七海が、軽い調子でコクコクとうなずく。
その様子に、ちょっと話しやすい気持ちになる。
「家庭の事情がある子どもがいる施設ってあるじゃない？　そういうのを調べているんだけど、プライバシーの関係でくわしいことがわからなくてさ」
「なんでそんなの調べてるの？　……あっ、もしかして将来そういうところで働きたいとか！」
七海が思いついた、とばかりに表情をかがやかせる。
「まあ、そんな感じ。**進路の候補**に入れてるだけっていうか」
今この瞬間も、将来のことなんて考えてなかったけど、ちょうどよさそうな理由なので、使わせてもらう。
「う〜ん……そういうところなら、**ボランティア**とか募集してないの？」
「ボランティア？」

「そうそう。前にテレビで見たことあるよ。学生がボランティアで子どもたちに勉強を教えたり、遊び相手になったりしてるところ。そういうのに参加すれば、働く様子とかもわかりそうじゃない？」
「……それって、すごくいいかも！　**七海、天才！**」
わたしにもできることが、まだあるかもしれない。
――そう思っただけで、少しだけ胸の奥があたたかくなった。
ミライの苑が、ボランティアを募集しているかはわからないけど、調べてみる価値はあるよね。
「お役に立てたならよかったよ。でも、春香がそういう施設に興味があるなんて、初めて聞いたよ」
七海が、不思議そうな顔でわたしを見る。
それはそうだよね。
わたしが七海だったとしても、いつから？　って思うし。
「ははは っ……最近興味を持ったの」

わたしは、笑ってごまかす。
ごめん、七海。
だましてるみたいで胸が痛むけど、これ以上くわしいことは言えない。
もしかして……幹也さんが聞きこみは自分がするって言ってたのって、わたしが**ウソをつく罪悪感**を覚えないでいいように？
幹也さんなら、そういうことをなにも言わずにしててもおかしくない。
まだまだ、気をつかわれてるなぁ。

3　潜入ルート発見

放課後になって、家に一度帰って着替えてからアジトに向かう。
制服でアジトに行かないのは、**幹也さんとの約束事の一つ**だ。
一目見ただけでも、制服はどこの学校かわかっちゃうから。アパートに出入りしている中学生なんて、あやしまれるもんね。
私服姿なら、それも少しはごまかせるというわけ。
預かっている鍵で、アパートのドアを開ける。
部屋の中に、幹也さんの姿はない。まだ来てないみたい。
わたしは鍵を閉めて、バッグを床に置くと、さっそくダイニングテーブルでノートパソコンを開く。
キーボードに指をすべらせ、七海からの情報をもとに、ボランティアについて調べ始める。

すぐに目的の情報は見つかった。
問題は条件だよね。
読みこんでいると、玄関のドアの鍵が開く音がした。
ドアが開き、幹也さんが姿を見せる。
わたしはそれを横目で確認しながらも、パソコンの画面から目をはなさない。
「春香、来てたのか……って、どうした？　そんなに夢中になってパソコンに？」
幹也さんは、けげんそうな顔を向けてくる。
「そんなに夢中じゃないですけどね。ミライの苑を調べる方法、友達と話してる中でピンときたんです。さっそく調べてみたら、見つかって」
「本当か。こっちはたいした手がかりもなくて、もう忍びこむしかないかと思ってたところだ」
幹也さんって意外と力押しだよね、と思って心の中でクスリと笑う。
「ミライの苑では、**学生ボランティア**を募集しているんです」
わたしは、ノートパソコンの画面を幹也さんのほうに向ける。

幹也さんはかがんでノートパソコンをのぞきこむ。
「応募資格は学生であること。中学生から大学生まで。未成年は保護者の承諾書が必要。……なるほどな、考えたな。ボランティアか。たしかに福祉施設なら募集していてもおかしくない。よく思いついたな」
「友達に相談したんです。ミライの苑のことは言わずに、興味があるけど調べる方法がないかって」
「それでボランティアか。機転の利く友人らしいな」
「そうなんです。頼りになるんですよ！」
七海をほめられて、わたしはうれしくなる。
ただ、幹也さんは少しだけ難しい顔になる。
「……**まあ大丈夫か**」
ぼそりと、幹也さんが言うのが聞こえた。
どういう意味だろう。わたしが友達に相談したのを、少し気にしてる？
「それより、このボランティアの募集だが、期限は**明日まで**だな」

「はい。明日締め切りです。締め切った二日後には連絡が来て、約十日後に行くみたいですね」
「申し込みからのスケジュールが早いな。それに毎月募集しているのか。ずいぶんオープンだ」
幹也さんが言うのもわかる。
隠しごとがある施設には思えないぐらい、人を招き入れているってことだよね。
「たくさんの学生に来てもらうためだそうです。理事長のコメントにも、予定を立てやすくするためって書いてありました」
「鳳山昭彦か。裏があるような話は見つからなかったな」
「わたしもです」
思わず、幹也さんと顔を見合わせる。
あやしい施設を疑っているはずなのに、見つかるのはいいところばかりだ。
「ボランティアは一日なのか？」
「いえ。土日で**泊まりがけ**です。ボランティアの宿泊先は、べつで用意されているそうですよ」
「いたれりつくせりか。今のところ、真っ当な組織にしか思えないな」
「でも、お兄ちゃんがリストに残したんです。絶対になにかあるはずです」
幹也さんは、あごに手を当てて考えこんでいたが、顔をあげる。
「そうだな。**幸樹を信じて、まずは調査をしてみよう**」

4　ミライの苑へ

土曜の朝。
まだ八時半だっていうのに、強い日差しにわたしは目を細める。
駅前は、部活に向かう中学生や高校生、買い物に向かう家族連れ、スマホを見ながら待ち合わせる学生たちであふれていた。
駅前のベンチにすわったカップルが朝ごはんを食べていたり、早くも汗をぬぐうおじさんがいたり。
夏のはじまりらしいにぎやかさに、どこか胸がすっとするような心地よさがあった。
そのざわめきの中でも、ひときわ目を引くのは、大きめの荷物を持った学生たち。
きっと、わたしたちと同じで、**あの施設**に向かうんだろうな。
ミライの苑のボランティアに応募したわたしと幹也さんは、無事に参加できることになった。

いつもは土日なのが、今回は連休ということもあって**三日間**のボランティアだ。
手がかりを見つけなきゃいけないわたしたちにとっては都合がいいけど、どれだけ探れるかは、行ってみなきゃわからない。
出たとこ勝負なのが、不安ではあるけどね。
それに、**この三日間で怪盗レイヴンとしての仕事も果たしたい**——それが、わたしと幹也さんの計画だ。
前のシロサキ・グループのときみたいに、事前に調べておけないのは怖い。
でも、幹也さんと一緒ならどうにかなるはず！
わたしは不安をふり切って、うなずく。
「どうした春香？　首をいきなりふったりして」
幹也さんが、けげんそうな顔を向けてくる。
今日の幹也さんは、淡いブルーのポロシャツと黒いジョガーパンツ姿で、大きめのボストンバッグを肩にかけている。
スタイルがいいこともあって、スポーティーな服装も当然似合う。

さっきから、このあたりで待っている女子にちらちらと見られているのも納得だ。
「なんでもないですよ。というか、その言い方だとわたしが突然首をふりだした**変な人**みたいじゃないですか」
「まさにそうだったから、言ったんだ」
幹也さんが、からかうように口元をゆるめる。
「え、ほんとですか!?」
あんまりな言いように怒るつもりが、本当に妙な行動をとっていたらしくて、思わずわたしは真剣に聞き返す。
「冗談だ。そこまでじゃない」
「あ〜、もう」
わたしは頬をふくらませて、不満をあらわす。
どうも最近、幹也さんにからかわれる機会が増えた気がする。
……べつに嫌な気はしないけど。
そんなことを話しているうちに、駅前のロータリーにバスが二台到着する。

バスの側面には、「**イリディウム財団**」のロゴがデザインされていた。
運転席から降りてきた男性が、にこやかな顔でこちらのほうを向く。
「ミライの苑のボランティアのみなさま、お待たせいたしました。名簿を確認いたしますので、私のところで受付をすませてから、バスに乗るようにお願いします」
はきはきとした明るい口調で男性が言うと、荷物を持った学生たちが男性の前でならぶ。
自主的にボランティアをしにくる人たちだけあって、とくにもめることもなく列ができあがる。
男性のところで受付をすませた人は、二台のバスに別れて乗っていく。
あの様子だと、乗るバスも指定があるらしい。
わたしの順番が回ってくる。
「お名前をお願いします」
「あ、朝霧春香です」
男性にうながされて、緊張しつつ答える。
「はい。確認がとれました。こちらのバスにお乗りください。席は自由です」

男性の後ろに停まるバスを、案内される。
わたしはバッグを持って、バスに乗りこむ。
座席を見ると、二人席が二列になっていて、四十人ぐらいはすわれそうだ。
だれもすわっていない席に、腰を下ろす。
窓から見ると、続いて受付をした幹也さんが、わたしが乗ったバスからはなれて、もう一つのバスのほうに乗りこんでいく。
……まあ、ちょっと残念。
でも、ひとりでも大丈夫だって、見せないとね。
バスに乗る間だけだし、子どもじゃないんだから不安なわけじゃないけど。
次々と、ボランティアの学生たちが乗りこんでくる。
男女で別れたわけでもなさそうで、男子学生も乗ってきてる。
なら、なにで分けたんだろう？
不思議に思ったけど、名簿をつくった順ということかもしれない。
「**ここいい？**」

考えていると、不意に声がかかる。
思わずびくっと肩をふるわせて、顔をあげた。
「ごめんね。おどろかせちゃった？　ここすわってもいい？」
片手をあげて、ごめんというポーズをとっている女の子が、座席の前に立っていた。
「もちろん大丈夫です」
あわてて返事をすると、女の子がすわる。

「ありがと」
ショートボブの髪に、くりくりとした好奇心旺盛そうな目が印象的な女の子だ。
たぶん高校生かな？
まちがいなく、わたしよりは年上だ。
小学生はボランティアの応募資格がなかったから、ここにいる中ではわたしが**最年少**なのはまちがいない。
「あらためて、わたしは**宮坂彩加**だよ。よろしくね」
となりにすわった女の子――宮坂さんが、笑顔を向けてくる。
「朝霧春香です。お願いします」
ぺこっと頭を下げる。
「そんなかしこまらなくていいよー。年下……だよね？」
「中一です」
「ええええっ！　見えないなぁ。わたしは**高校一年**だよ。でも、敬語とか気にしなくていいよ。ため口でいいからね」

「でも……」
そんな年上相手に、いきなりため口っていうのは、抵抗があるよ。
「無理にため口にしなくてもいいけど、そういう気分でってこと。年上だけど、べつに学校の先輩なわけじゃないからね」
「わかりまし……わかったよ」
敬語を使いそうになって、言い直す。
「しゃべりやすいほうでいいよ。**春香ちゃん**って呼んでいい？　わたしも彩加でいいからさ」
「いいですよ。わたしは**彩加さん**で」
「じゃあ、ここで一緒になったのも縁だし、仲良くしよ」
「こちらこそ」
わたしは笑顔で応じつつ、ほっとする。
その自分の反応で、初めてのボランティアに不安を感じていたんだと気づいた。
だけど、どうにかなりそうだ。彩加さんもいい人そうだし。

「あれがそうじゃない？」
彩加さんが、窓の外を指さす。
ほかの座席からも、声が上がっている。
白い大きな建物が、見えてくる。
横への広さだけなら、学校の校舎ぐらいはありそうだ。
二階建てのように見えるから、学校ほどは大きくはなさそうだけど。
「**あれがミライの苑**……」
お兄ちゃんが残したリストから、たどりついたターゲットだ。
制限時間は三日。
その間に、あそこでなにが行われているのか突き止めて、その証拠を持ち出す。
――**それが怪盗レイヴンの仕事だ。**

5　封じられた上履き

「到着いたしました。荷物を持って、順番に降りてください」
バスが駐車場で停まると、乗客は順番に降りるように指示された。
「さっき見えた建物の前じゃないんだね？」
彩加さんが、けげんな顔をしている。
「ここから歩くとか、かなぁ？」
暮らしている子どもたちをおどろかせないように、あえて少しはなれたところに停めるのかもしれない。
そう考えれば、遠くに停めるのも、まあ納得できるかも。
「かもね。……ほら、バスに乗ったら知らない場所で降ろされる、なんて事件っぽいじゃない？　わたし、そういう**ミステリー**とか**ホラー**、けっこう好きなんだよね」
彩加さんは、はしゃいだ様子で耳打ちしてくる。

さすがに、そんなことが起きてたら、もうウワサになってるよ。
……そんなはず、ないよね。
冷静になろうとしたのに、落ち着かない気持ちが頭の中をぐるぐる回る。
バスから降りたあと、まわりを見回してみる。
近くには、白っぽい外壁の五階建ての**マンションらしき建物**がぽつんと立っている。
その周囲には建物らしいものは見当たらず、遠くには、濃い緑の森が山の斜面にそって広がっている。
アスファルトのすき間からは雑草が顔を出し、どこかからは虫の鳴き声も聞こえてきた。
さっきまでの駅前のにぎやかさがウソみたいで、空気まで澄んで感じられた。
……だいぶ山奥に来たんだな、って思った。
観察をしていると、もう一台のバスから降りてくる幹也さんの姿を見つけて、少しだけ気分が落ち着いた。
「ここはどこですか？」
ボランティアの大学生らしい男の人が、不安そうにたずねる。

「ご説明がおそくなって申しわけありません。先にお荷物を**宿泊施設**に預けていただきたくために、こちらにご案内いたしました。ミライの苑は、ここから十分ほど歩いたところにございます」

運転手の男性の説明に、ボランティアの学生の中の一部にほっとした空気が流れる。

たぶん、二回以上来ている学生は、ここが宿泊施設だって気づいていたはずだし、不安に思っていたのは、わたしみたいに初めて来た学生なんだろう。

そのまま男性に案内されて、目の前のマンションらしき建物に入っていく。

中はマンションというより、ホテルみたいなつくりになっていた。

一階にはロビーや食堂があり、二階から上が客室らしい。

「部屋割りはこちらになります」

運転手の男性から、プリントを渡される。

そこには、部屋割りが書かれていた。

当然だけど、男女べつだから幹也さんとはべつべつだ。

そのかわり……

「**あ、やった！** 春香ちゃんと一緒だ」

彩加さんがプリントを見て、喜んでいる。

知り合いになれた彩加さんと部屋が一緒なのは、わたしもうれしい。

ここから、また知り合いになるところから始めるのは気が重いし。

なにより、彩加さんはいい人そうだから。

彩加さんと同じ部屋になれたのは、たぶん偶然じゃない。

ほかの女子たちは友達同士で来ていて、一緒に応募してきた人は同じ部屋にしているんだと思う。

残ったわたしみたいに男女だったり、女子一人で応募した人を同じ部屋にした。彩加さんもきっとその一人だったんじゃないかな。

荷物を部屋に置いたらすぐに集合するように言われて、軽い身支度をするとまた宿泊施設の一階に集合した。

「それでは、ミライの苑へご案内します」

わたしたちは、運転手の男性に連れられて宿泊施設を出て、歩いていく。

少し歩いたところで、さっきバスの中から見えた、大型の建物が現れる。
さっきまでは、木々にさえぎられて見えなかっただけらしい。
やっぱり学校の校舎ぐらいの大きさがある。
「うわぁ……児童養護施設としては、破格の大きさだよね」
彩加さんが、となりを歩きながら言う。
部屋で着替えて、ジャージのズボンにTシャツ姿になっていた。
わたしも似たような格好だし、ほかのボランティアの人たちも、多少のちがいはあっても**動きやすい服装**をしている。
ボランティアに参加するにあたって、動きやすい服装を用意してくるように指定されていた。
ボランティア中はこの服でほとんど過ごすって書いてあったから、替えもふくめてちゃんと用意してきた。
学校の名前が入ったジャージを着ている中高生も多いけれど、わたしと幹也さんはスポーツブランドのものを着ている。

わたしと幹也さんの目的を考えると、学校の名前はあんまりばれたくないし。
もちろん、申し込み時に学校名は伝えてある。
でも、だからといって、目立つ必要はない――そういう判断だった。
それに三日間もあるならどうせ毎日着替えるし、学校のジャージだけじゃ足りないもんね。
建物の入り口前まで来ると、水色のそろいの服を着たスタッフらしき男性と女性が立っていた。
その横にスーツ姿の男性が立っている。
スーツの男性の顔は、見たことがあった。
ここ数日、よく調べていたから覚えてる。
……理事長の鳳山昭彦!?
まさか、ここで会えるなんて。
わたしのおどろきをよそに、スタッフの二人は笑顔をこちらに向けると言った。
「ボランティアのみなさん。ミライの苑へようこそ」

「ようこそ来てくれました。理事長の鳳山です」
スーツ姿の鳳山さんは、にこやかに笑いながら、わたしたちにあいさつする。
ボランティアの人たちは、さすがに鳳山さんの姿は知っている人がほとんどなのか、おどろいている人が多い。
そもそも、イリディウム財団の理事長なのに、その施設の一つであるミライの苑にいるなんて、思ってもいなかった。
「ちょうど、こちらに**定期視察**に来ていたんです。子どもたちとも会わないと、忘れられてしまいますからね」
冗談交じりに言って笑う。
つられて、ボランティアの中から小さく笑い声がもれた。
写真や動画で見たままの印象だ。
人あたりがよくて、話し方もこちらの目線に合わせていて、高圧的なところがない。
人を惹きつける魅力があるのか、鳳山さんが話していると耳を傾けてしまう。
「ここで引きとめてしまっても悪いね。みなさんを案内してあげてください。今日から三日間、よろしくお願いしますね。それでは失礼します」
スタッフに言うと、鳳山さんは一礼して施設の中にもどっていく。
その姿を見送ってから、スタッフの二人がボランティアのわたしたちのほうを向いた。
「じゃあ、まずは簡単な説明と、みなさんにお願いする作業についてお話ししますね」
ミライの苑に入ってすぐ、わたしたちはスタッフの案内で、広い談話スペースのような部屋に通された。
長テーブルがいくつもならんでいて、陽当たりがよくて、きれいに整っている。
でも、不思議なくらい静かだった。子どもたちの声が、どこからも聞こえてこない。
「ねえ春香ちゃん、もしかして……子どもたちとはすぐに関わらないのかな？」
となりで彩加さんが、小声でつぶやく。
「かもしれないです。まずは**裏方仕事**からって感じなのかも」
わたしも声をひそめて返しながら、まわりを観察する。
この施設で、本当に裏でなにかが起きてるのなら――その「**裏**」こそ、今から見る場所にあるのかもしれない。

「それでは、今日の午前中はみなさんに、**備品の整理**や**倉庫の清掃**をお願いしたいと思います」
スタッフの女性がそう言うと、何人かの大学生ボランティアが小さくうなずいた。
「重たい作業や脚立を使う仕事は、こちらで担当者を決めますので、ご安心くださいね」
割り当てられたのは、館内の端にある備品庫の整理だった。
ホウキやモップ、空っぽの段ボールに、季節外れの毛布類――どれも施設の生活に必要なものだけど、子どもたちの気配はそこになかった。
「なんか、学校の文化祭の準備みたいだね」
彩加さんが、モップを運びながらつぶやく。
「うん。でも……**思ったより、人の気配がないですね**」
施設の中には、きれいに整えられた空間と静けさが広がっている。
それが逆に、不自然なほど整いすぎているように思えてきた。
「春香ちゃん？」
「……ううん。なんでもないですよ」

立ち読みサンプル
はここまで

まだ決めつけるには早すぎる。
そう自分に言い聞かせて、目の前の棚に雑巾を持った手をのばす。
雑巾で棚をふいていると、棚の上に**少し古ぼけた箱**があった。
ほかはきれいな箱が多いのに、これだけ使いこんだような跡があった。
その箱のフタが、少し浮いている。
気にせずに掃除を続ければいいはずなのに、なぜかその箱から目がはなせなかった。
――**まるで箱が語りかけてくるみたいだった。**
「これ……開けていいのかな」
わたしはこっちを見ている人がいないのを確認して、そっと箱を開けて中をのぞく。
中にあったのは、**色あせた名札**と、**子ども用の小さな上履き**。
上履きに字が書いてあるけど、インクがにじんでいて読みづらい。
……メ……ア？
長いあいだ使われていたのか、上履きの文字はすっかりかすれていた。
子どもが使っている備品かな？